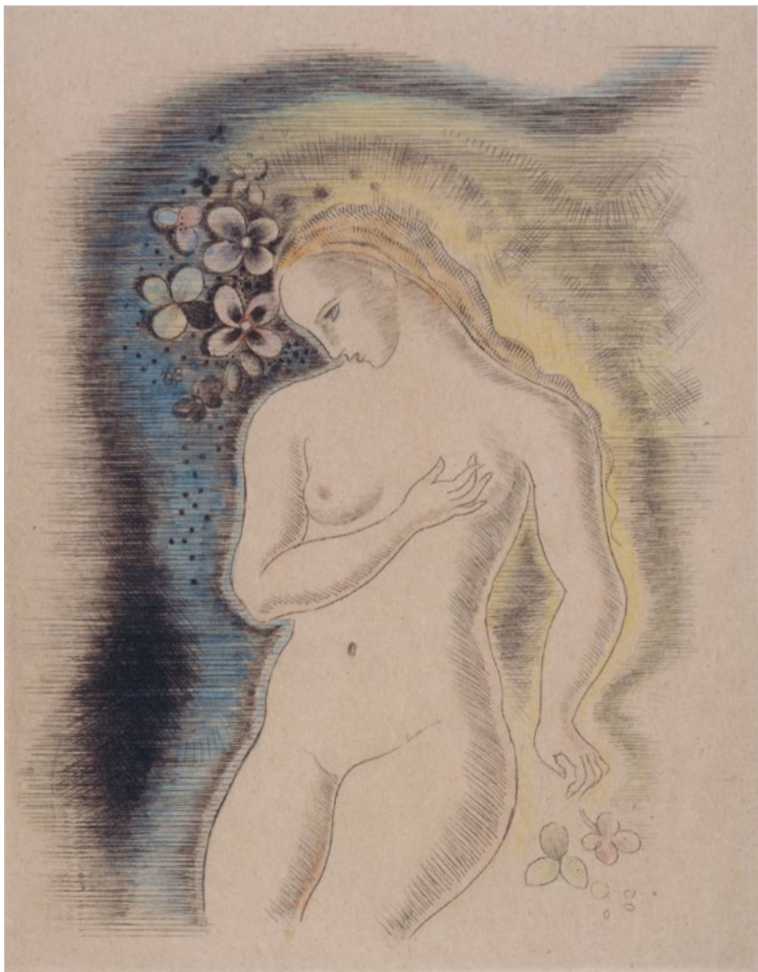


板倉鼎《剣のある静物》1927年 独立行政法人国立病院機構千葉医療センター蔵

館長のつれづれコレクション案内

在仏約60年 長谷川潔の初期作品



長谷川潔 「思想の生まれる時」

1925年 紙・ドライポイント、筆彩 12.5×9.6cm

首を傾けた女性の背後は金色の光に包まれ、額の上部には大輪の花と舞飛ぶ蝶が描かれています。女性の頭頂より前は澄んだ青い空間、そこに浮かぶ黒く細かい点、視線の先には背後から流れてきた漆黒の浮遊体のようなものがよんでいます。女性は左上からの光に照らされていますが、長谷川作品の多くに見られるように、画面全体はその光には満たされず、絵ならではの不思議な空間となっています。女性の内面で、混沌としたものから何かしら形あるものが光によって生み出されるようです。

作者は長谷川潔(1891-1980)。西洋風の女性をモチーフに、細い水平線を重ねて背景に安定感をもたらしつつ、女性の体は斜めの線で丸みを表し、頭部から背中にかけての背後の光は輪郭線に直交するような線を重ねて動きを感じさせ、線による巧みな表現がなされています。1918年にフランスに渡り、版画によってサロンに入選を果たし、画壇に認められ始めた頃の作品です。

長谷川は国立第一銀行横浜支店長を父に富裕な家庭に育ち、20歳の頃から洋画家黒田清輝が主宰する葵橋洋画研究所で素描を学びました。続いて黒田の弟子岡田三郎助と藤島武二が営む本郷洋画研究所に学び、1913年自画自刻の木版画を制作して、「聖盃」(のちに「仮面」と改称)主催洋画展に木版、銅版画などを出品。1916年広島晃甫、永瀬義郎らと日本版画倶楽部を創設したほか、日夏耿之介の著作の表紙や挿絵を手掛けています。1914年に始まった第一次世界大戦により、機械文明が必ずしも人間を幸せにするわけではないという風潮が広まる中、日本では自然と人間を

対立的に考えてこなかった従来の思想の見直しが必要で、美術の世界でもヨーロッパからの情報が入りやすくなったためあって、日本、東洋の従来の表現を再評価する動きがみられた時期でした。

日本近代美術を振り返る時、西欧文化にどう応ずるかが作家たちにとって避けられない問題であったことがわかります。留学をするか、しないか、異国に渡った後、とどまるか、帰るか——現在よりも行き来も容易でなく、情報網も調べていない中、その選択は重いものでした。フランスは憧れの地でしたが、実際に渡るのは気力、体力、財力が調わなくてはならず、美術の本場とされたフランスで認められるまで滞在を続けるのはさらに困難でした。

長谷川は、1918年の渡仏後も日本に作品を送り続け、1928年に春陽会会員、1931年日本版画協会創立会員となるなど、日本の美術界ともつながりながらも、1939年に第二次世界大戦が勃発しても帰国せず、戦火を逃れて各地を転々としながらフランスに残りました。そして、戦後も銅版画を中心に制作し、西洋の古典的銅版画技法を復活させ、黒い地からモチーフが浮かび上がるようなマニエール・ノワールと呼ばれる様式で評価を得ています。

「思想の生まれる時」に見られる線による表現や黒という色の活かし方は晩年までつながっているようです。それは、日本人としてフランスで制作を続けることへのこだわりにもかかわっているのかもしれませんが。

【館長 山梨絵美子】

板倉 鼎

2024年
4/6(土)
—6/16(日)

担当学芸員
インタビュー

須美子

展



【図2】板倉鼎《休む赤衣の女》
1929年頃 個人蔵
(松戸市教育委員会寄託)

4月より始まる「板倉鼎・須美子展」は、夫妻である板倉鼎(いたくらかなえ・1901-29)と板倉須美子(いたくらすみこ・1908-34)を追った展覧会です。二人は結婚後すぐにハワイを経由してフランスへ渡り、活気溢れるパリで制作を行います。しかし、不運にも病に倒れ、若くして帰らぬ人となってしまいました。板倉鼎と須美子は、どのような画家であり、どのような人生を歩んだのか。担当学芸員に聞きました。[話し手: 上席学芸員 西山純子]

—はじめに板倉鼎と板倉須美子はどのような人物か教えてください。

鼎は、幼い頃から松戸市に過ごした千葉県ゆかりの作家です。旧制千葉中学校に通い、東京美術学校に進学。洋画家を目指し油絵に取り組み、1925年に須美子と結婚します。そして、翌26年に須美子とともにパリへ留学し、制作を行いました。須美子は、もともと絵を描いていたわけではありませんでした。文学には興味があったようで、育った環境としても芸術に触れる機会は多かったと思いますが、パリへ渡ってから鼎に教えてもらうかたちで油絵を始めました。

—今回、なぜ千葉市美術館で二人の展覧会を行うことになったのでしょうか。

まず、令和3年にご遺族より33点の作品を寄贈いただいたことが大きなきっかけとなっています【図1】。また、藤田嗣治や佐伯祐三を筆頭に、多くの作家がパリに集まった時代と同じ地で活動していたことは、とても普遍性があるテーマだと感じました。



【図1】板倉鼎《ダリアとグラジオラス》1927年
千葉市美術館蔵(神崎眞子氏・板倉剛氏寄贈)

—たしかにどちらも日本ではなじみのある作家です。

さらに、鼎と須美子の作品や資料は、ほとんどそのまま残っているんですね。これは、鼎の妹の弘子さんが、幼少期の資料や書簡までひとつ残らず大事に保管していたものです。とくに書簡は、松戸市教育委員会が長い時間をかけて調査を行い、一冊の書簡集にまとめています。ですので、二人の一番良い時期であるパリの3年間のことが、リアルな言葉を含めありのままわかるんですね。これがおもしろい展覧会につながりそうだと思います。企画しました。

—二人が留学した当時、パリはどのような場所だったのですか。

当時は、芸術の都を目指し、世界各国からたくさんの作家がパリに集まっていた。一時期には、日本人画家は2~300人ほどいたと言われ、日本語だけでも生活できるような環境だったようです。後に「エコール・ド・パリ」と呼ばれることになる、芸術が大きく花開いた時代でした。鼎は、パリで大成するまで帰らないつもりだったのではないかと思います。家族に宛てた書簡には、「フジタは世間に出るまで8年かかった」と書かれていたりもします。

—多くの日本人画家のなかで制作をするのは、ある意味でとても大変そうですね。

言ってしまうと、現地の画風を日本に持ち帰るだけで、ある程度の評価は得られたのだろうと思います。しかし鼎は、画家として頭一つ抜けることを目指し、「だれかの真似ではなく自分のオリジナリティを確立しなくてはならない」「日本人画家としてパリで認められなければならない」と考えていました。その手法を掴みかけたところで、無念にも亡くなってしまいましたが……。

—当時の「パリで認められる」とはどのような状況を指すのでしょうか。

サロンで入選を重ね、格式の高いギャラリーで作品が扱われ、美術批評家から評価される、といったところだと思います。日本人で達成できたのはごくわずかでしたので、いかに厳しい世界だったかがわかります。

—鼎の作品の特徴はどういったところにあると思いますか。

師匠であったフランス人画家のロジェ・ビシエールに近い部分もありますし、同時代の画家おかしかのすけの岡鹿之助やなんじょうかづおの南城一夫の作風を想起させる表現もありますね。キュビズム以後の視覚が反映されているのは確かなようです。チラシのメインビジュアルになっている女性像の顔も、左右から見た顔をくっつけたような構成になっています【図2】。鮮やかな色面構成から成るキュビズム的なものの見方に、詩的な情感を込めるといったところが持ち味かなと思います。

—描かれている女性は須美子がモデルになっているのですか。

そうです。藤田嗣治が独特の白い画肌による裸婦の連作で世に出たように、鼎は赤い衣服をまとった須美子を描き続けることで、なにか一つの個性を生み出そうとしていたのではないかと思います。今回の展覧会場でも、須美子の絵が並んだ壁が出現すると思います。

—一方で須美子はなぜ絵を描き始めたのでしょうか。

当時はまだ子どもがいなかったので、時間もあつたのではないかと思います。パリに滞在する日本人の多くは、社交場でもあるカフェで過ごしていましたが、二人はそういった場から距離を置いてひっそりと暮らしていました。そこで、自由な時間が生まれた須美子は、鼎の使った残りの絵の具で絵を描き始めたようです。

—須美子の作品は非常に空想的でロマンチックですね。

須美子は正式に絵を学んではいませんが、感

性はとても豊かな人だったと思います。ロシア文学者の父をもち、先進的な教育で知られた文化学院の一回生でした。鼎と須美子は、パリへ行く前にハワイに滞在するのですが、そこで日本の女性のあり方を見つめ直したり、パリでも「女性も家事や育児だけでなくやりたいことをやるべき」と主張したりなど、進歩的な考えを持っていました。家族に宛てた書簡を読むと、非常に詩心のある言葉遣いが印象に残ります。そういった童心や詩心を素直に絵に残しました【図3】。

—鼎は須美子の制作をどのように受け止めていたのでしょうか。

鼎は須美子に理解をもって接しており、画才を開花させてゆく姿を温かく見守っていました。じつは、パリでは須美子のほうが評判が良かったという説もありますが、鼎はやきもちを焼きつつも須美子の絵を認めていました。子育てをしながら二人で絵を描き続ける、これは新しい家族のあり方でもあるなと感じます。

—展覧会では、どのような構成で作品を見ることができるのでしょうか。

エスキースをふくめ約240点の出品を予定しており、須美子の作品は一部屋にまとめるかたちになりますが、年代を追って展示する予定です。また、鼎や須美子が家族に宛てた書簡から、印象的な言葉を引用して掲示したいと考えています。書簡には二人の生活がありありと綴られていて、大変貴重な資料です。

—おすすめの作品を選ぶとしたらどれですか。

私は鼎の静物画が好きですね。しみじみいいな、と感じます。よく登場するモチーフに金魚が入った水槽があるのですが、鼎がセーヌ川沿いで金魚を買った記録が残っているので、実際に飼っていたようです【図4】。真正面を向いた金魚も描かれていて、三次元を二次元に落とし込む実験をするのに最適なモチーフだったのかもしれない。

—ひさしぶりの大規模回顧展、とても楽しみです。

鼎は、1930年に遺作展が開かれましたが、その後は残念ながら芳しい評価はなされてきませんでした。1980年に千葉県立美術館で40点ほどの個展が開催され、その後松戸市が調査に着手し、評価の土台が築かれました。この展覧会をきっかけに、国内外でもっと評価が高まることを期待しています。

板倉鼎・須美子展

会期 2024年4月6日[土]—6月16日[日]

会場 8・7階 企画展示室

休室日 4月15日[月]、5月7日[火]、20日[月]、

6月3日[月]

※第1月曜日は全館休館

詳細はホームページよりご覧ください



【図3】板倉須美子《ベル・ホノルル24》1928年頃 松戸市教育委員会蔵



【図4】板倉鼎《金魚》1928年 松戸市教育委員会蔵



「つくりかけラボ14 荒井恵子 | 和紙のフトコロ 墨のダイゴミ」がはじまりました!

プレワークショップ+アーティストパフォーマンス レポート

2月14日(水)から、荒井恵子さんによるプロジェクト「和紙のフトコロ 墨のダイゴミ」がスタートしました。

開幕に先立って行われたプレワークショップと、開幕直後に行われたアーティストパフォーマンスの様子をご紹介します。

2月4日(日) プレワークショップ「障子貼り体験」

つくりかけラボの空間づくりのために荒井さんが自ら集めた障子の枠に、和紙を貼るワークショップを行いました。



はじめに好きな障子の木枠を選んで、障子紙を枠にあてて位置を決めていきます。

位置が決まったら棧(障子の骨の部分)に糊を塗って、障子紙を丁寧に置いて合わせます。



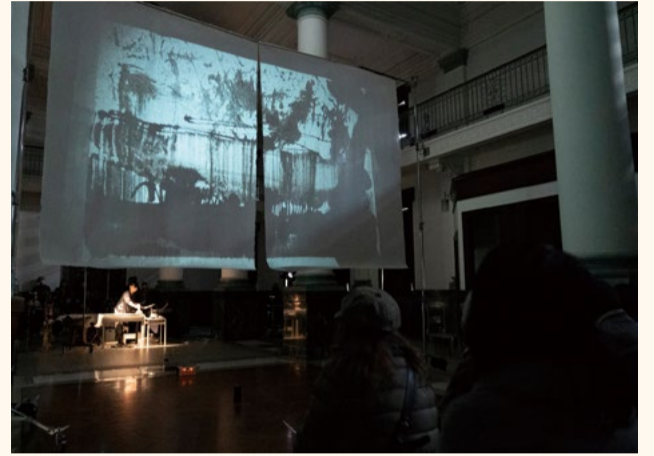
塗り残しがないか、障子紙が棧にちゃんとしているか、くまなく**チェック!**

余った紙の部分はカットし、糊が乾いたら、霧吹きでシューっと障子紙全体を濡らします。それが乾いてピンツと紙が張り、指で弾いた時太鼓のように気持ちのいい音が鳴ったら**完成です。**

参加者の皆さんからは「意外と大変な作業だったけど楽しかった」「実際に障子がどうつくられているのかがわかった」「和紙がきれいで、完成した障子が並ぶととても嬉しい」などの感想をいただきました。

2月18日(日) アーティスト・パフォーマンス「和紙と墨 表現と公開制作パフォーマンス Danse des matériaux 2024」

オープニングをかざるアーティスト・パフォーマンスがさや堂ホールにて行われました。荒井さんが制作の中で感じる和紙と墨の表現の豊かさや面白さが、和紙の上を走る筆の動きや、和紙の繊維に染みこむ墨の濃淡によって表現され、そして同時に、中央に立てられた巨大な和紙のスクリーンに制作した画面が映し出されました。



スクリーンの和紙は岩野平三郎製紙所でつくられた手漉きのもの。実際に取材した時の様子は、4Fの会場にて上映中です。



今回のつくりかけラボは...

和紙のフトコロにとびこむ、墨のダイゴミを味わう

和紙に触れる

障子の和紙に実際に触れて、穴をあけてみます。穴をのぞくと何が見えるでしょうか。あいた穴は、また和紙を使ってふさぎます。生活の中で和紙を大切に使用したのでしょ。



プレワークショップで貼った障子は、つくりかけラボの空間の一部になっています。ぜひ皆さん見にきてください!



墨と出会う

来館者の皆さんにお持ち寄りいただいた墨を使って、墨を磨る心地よさ、墨の濃淡やにじみを体験するコーナー。ここで描かれた和紙は、障子の穴をふさぐために使ったり、4月に予定されている漉き返し体験のワークショップで再生和紙に大変身します



今後も様々なイベントが続きます!
最新情報はHPから!

つくりかけラボ14
荒井恵子 | 和紙のフトコロ 墨のダイゴミ
会期 2024年2月14日[水] - 5月26日[日]
休館日 3月4日[月]、4月1日[月]、5月7日[火]
会場 4階子どもアトリエ
入場料 無料



2024年度 展覧会スケジュール

	2024.4	5	6	7	8	9	10	11	12	2025.1	2	3
企画展	板倉鼎・須美子展 4月6日[土]-6月16日[日]		岡本秋暉 百花百鳥に挑んだ江戸の絵師 摘水軒コレクションを中心に 6月28日[金]-8月25日[日]		Nerhol展(仮称) 9月6日[金]-11月4日[月・祝]		ザ・キャビンカンパニー 大絵本美術展 童堂賛歌 11月16日[土] -2025年1月13日[月・祝]		第56回 千葉市民 美術 展覧会 2月22日[土] -3月14日[金]		開館30周年記念 プラチスラバ 世界絵本原 画展 2024- 2026(仮称) 3月22日[土] -5月18日[日]	
	両洋のまなざし 石井光楓展 4月6日[土]-6月16日[日]		江戸絵画縦横無尽! 摘水軒コレクション名品展 6月28日[金]-8月25日[日]		Nerhol展関連 コレクション展(仮称) 9月6日[金]-11月4日[月・祝]				房総ゆかりの美術 特集:深沢幸雄 2月22日[土] -3月14日[金]		千葉市美術館 のABC(仮称) 3月22日[土] -5月18日[日]	
常設展	千葉市美術館コレクション選 ※近世・近代美術は1ヶ月おき、現代美術は3ヶ月おきに展示替えを行います。											
つくりかけラボ	つくりかけラボ14 荒井恵子 和紙のフトコロ 墨のダイゴミ 2月14日[水]-5月26日[日]		つくりかけラボ15 齋藤名穂 空間をあむ てざわりハンティング Tactile Hunt Weaving Space 6月12日[水]-9月29日[日]		つくりかけラボ16 金川晋吾 10月12日[土]-2025年1月26日[日]		つくりかけラボ17 井上尚子 2月12日[水]-6月1日[日](予定)					

「サムライ、浮世絵師になる! 鳥文齋栄之展」プレ企画

浮世絵に描かれた江戸名所を訪ねて

昨年11月28日(火)に友の会会員限定イベント 日帰りバスツアー「浮世絵に描かれた江戸名所を訪ねて」を開催しました。友の会バスツアーはコロナ禍で中止が続き約4年ぶりの開催となりましたが、たくさんのご応募をいただき、満員御礼で催行することができました。

【当日の行程】



日本橋クルーズ

最初の目的地、日本橋川・神田川・隅田川を一周するクルーズに向かいます。

東海道をはじめとする五街道の起点である「日本橋」のたもとから出発した船は、数々の橋の下をゆったりとくぐり、次々と東京の名所を廻っていきます。

ベテランのガイドさんによる楽しく分かりやすい案内を聞きながら、江戸時代から現代まで続く歴史の流れを肌を感じていると、約90分間のクルーズもあっという間に時間が過ぎていきました。



クルーズ船からの風景

昼食

昼食は、COREDO日本橋4階に店舗を構える「奈美路や」へ。同店には、友の会バスツアー特製ランチを考案していただきました。

江戸時代のレシピ本「豆腐百珍」に紹介されている江戸の保存食「豆腐の味噌漬け」、江戸時代に人気のあった花魁^{うらま}の浦里が、馴染みの旦那さんと迎えた朝に自ら持えたという一品「浦里」などなど。江戸の人々が楽しんだであろう料理の数々に、皆さま舌鼓を打っていました。



特製ランチ



クルーズ船内の様子

待乳山聖天・三囲神社

日本橋散策の後は、再びバスに乗り浅草方面へ。

待乳山聖天と三囲神社は、鳥文齋栄之展に出品された《三福神吉原通り図巻》(千葉市美術館蔵)にも描かれる、隅田川から吉原へ向かう途中にある名所です。

夫婦和合・商売繁盛のご利益で知られ、江戸の商人からの信仰を集めた待乳山聖天、江戸の大家「越後屋」を営んでいた三井家が篤く信仰した三囲神社。

古くから由緒のあるスポットを徒歩で巡ったあとは、桜の名所として知られる墨堤通りで購入した「長命寺の桜もち」を手に、バスで千葉への帰路につきました。



待乳山聖天 拜殿



《三福神吉原通り図巻》に描かれた真乳山聖天宮(待乳山聖天)



浮世絵にも多く描かれた三囲神社の鳥居



三囲神社 雨乞いの句碑

友の会のご案内

みなさまに千葉市美術館をもっと身近に感じて楽しんでいただくため、今回開催した「友の会バスツアー」や、学芸員によるギャラリートーク、スライドレクチャーなどの会員限定イベントをはじめ、各種サービスを提供しております。ぜひご入会ください!

■ちばしびフレンズ

入会金 1,000 円 + 年会費 2,000 円

どなたでもご入会いただける1年間の会員プログラムです。企画展・常設展が無料で何度でもお楽しみいただけるほか、当館の企画展情報などのお知らせや提携する美術館・博物館での割引が受けられます。

■ちばしびフレンズ・ライト

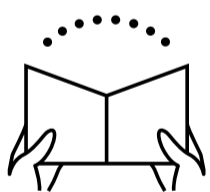
入会金 500 円 + 年会費 1,000 円

39歳までの方を対象にした1年間の会員プログラムです。常設展はいつでも無料、企画展はお好きなものを年間2回までお楽しみいただけます。

今なら会員証は鳥文齋栄之!



詳しくはホームページまたはパンフレットをご覧ください。



びじゅつライブラリーおすすめ本紹介コーナー 本をみる、美術をよむ vol.11 板倉鼎・須美子の時代を知る6冊

「板倉鼎・須美子展」にあわせ、鼎と須美子がパリに過ごした時代を味わえる本をご紹介します。エコール・ド・パリ最盛期、当時のパリの雰囲気をお楽しみください。ご紹介している本は、会期中びじゅつライブラリーでもお読みいただけます。

田中典子編 『板倉鼎・須美子書簡集』



パリに滞在した3年間を中心に、二人が鼎の家族に宛てた約370通の書簡を活字化し年代順にまとめた一冊。暮らしや家族、制作のことなどについて、まめに書かれています。「板倉鼎・須美子展」の必携書です。

徳島県立近代美術館編 『薩摩治郎八と巴里の日本人画家たち』



薩摩治郎八は東京生まれの大富豪。パリに滞在する日本人美術家が開催した展覧会を資金援助し、この本にはその出品作家がまとめられています。当時、パリで活動した日本人美術家たちを総覧できる一冊です。

徳島県立近代美術館、山梨県立美術館他編 『巴里憧憬』



「芸術の都・パリ」に集まった美術家に焦点を当てた展覧会の図録です。エコール・ド・パリを代表する海外美術家や、パリへ渡った日本人美術家(洋画家だけでなく日本画家も)の動向を詳しく知ることができます。

大久保守 『夢は大海原を越えて 今よみがえる洋画家石井光楓の軌跡』



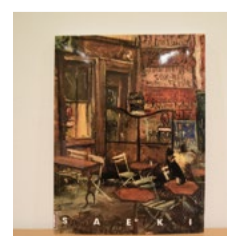
同時開催のコレクション展で取り上げる石井光楓も、板倉鼎と同時代にパリで活動した房総ゆかりの画家です。アメリカへ渡り、パリへ渡り、世界で学んだ光楓について、綿密な調査に基づいて記されています。

藤田嗣治 『巴里の横顔』



藤田嗣治初のエッセイ集。「パリの流行」「パリの百貨店」「パリの画家」など、さまざまなテーマで(時にはとてもニッチなテーマで)パリについて記しています。藤田の目を通して当時のパリの生活を見てみませんか。

鹿児島市立美術館編 『佐伯祐三とパリの時代展』



佐伯祐三は、ポスターや看板の「文字」を強調してパリの街角を描いた作品で知られ、近年も大規模回顧展が開催されています。同タイトルの展覧会図録である本書では、佐伯の周辺作家もふくめ紹介されています。